

連載 新しい書写実践の試み ②

日常生活に生かす楷書学習

楷書の基本点画の学習から国語の漢字学習へ

新しい指導を考える会

1 実践の趣旨

学習指導要領「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の「2 言語事項」(3)に「書写の能力を生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること」とある。ここでは、書写の学習を生活に生かす力(仮に「生活書字力」としておきたい)を身につけるための指導のあり方を考えてみたい。

指導にあたっては、まず生徒の書写に対する意識をつかむためにアンケートを取るのも一つの方法であるが、日頃の言動なども参考になる。呼称をとつても、「書写」はなかなか定着していないようで、少々乱暴であるが、「書写」はあくまで学校の授業の呼び名であり、教師とのやりとりにはのみ用いられているととらえられなくてもいい。

例えば、一年生の国語係に、

「明日の国語は毛筆書写だよ。」

と連絡すれば、係の生徒からは、

「作品は、教科書のどれですか?」

と聞かれる。そして、生徒間のやりとりには、「習字」「書道」が飛び交う。

このような例は、一学期の間はしばらく続くが、「書写」の学習が進むにつれて徐々に聞かれなくなる。逆に、教科書の教材文字を作品(参考手本)として授業を進め続けるのであれば、上の学年になっても、その意識が変わることはないだろう。

「生徒は、教師が思っているほどたやすく書写学習と日常生活を結びつけることはできないのではないか。」という仮説が成り立つとすれば、単に「日常生活に生かそう、ノートの文字も気をつけて書こう……。」と指導しても、なかなか教師側の願うようにはならない。また、教師も日常の国語学習に書写学習を生かすという意識をもち、あらゆる機会を生かして指導する姿勢が求められるのではないか(書写の時数確保のために曲解しないよう留意したい)。教師自身の毛筆技能は問題とすることなく、「日常に生かす」第一歩として書写を通して国語の授業を見つめることが必要だろう。具体的には、国語の授業の中で、書写用語(文字の大小・行の中心・配列配置・字間や行間・余白など)を用いた書写指導をしていくことである。

今回の実践は、例年各学年で実施している書写の授業開きのうち、一年生の授業開きを生かしたものである。書写に対する関心を高め、日常生活で書写を意識させるためには、入学後の早い時期に書写の授業で「驚き」を与える必要があると考えた。楷書の基本点画と漢字指導を関連させ、書写に対する関心・意欲・態度を向上させるとともに、「必要感」をもつことをねらった授業を組んだ。漢字学習にも書写の知識や技能が大切であることに気づけば、書写学習の日常化が図れるにちがいない。

2 授業の実際

「基本点画を意識して楷書を書こう」(一年)

〈本時の目標〉

基本点画の名称と形を理解し、漢字学習に役立てる。

「書写学習の要素」楷書の基本点画

※授業開きの小テストでは形を板書し、名称を書かせた。

(数字は正答率)

- A 横画 (0) B 縦画 (0) C 左払い (25)
- D 右払い (25) E 曲がり (0) F そり (0)
- G 折れ (5) H 点(調査外)

〈指導計画〉(「楷書を書こう」全五時間のうち本時は特設)

- 第一時……楷書の点画の名称を確かめて書く。 P 8・9「大地」

第二時……基本点画の名称と形を理解し、漢字を正しく書くために書写に対する意識を高める。 P 8「楷書の点画の筆使いを確かめよう」

第三時……楷書のいろいろな書き方を理解し、筆使い・筆順・字形を確認する。 P 10・11「楷書のいろいろな書き方を知ろう」

〔新風〕

第四時……字形を整えるポイントや筆順の原則を理解する。 P 12・13「文字の秘密を探ろう 字形と筆順」

第五時……原稿用紙やノートの書き方を理解する。 P 14・15「生活に生かそう」

一年国語科書写 授業開き

さあ、字を書こう、そして言葉・文・手紙・文章・記録・台本・日記に生かそう。
 ※書写学習→学校・家庭・社会生活に生かそう!「生活化」
 いつでもどこでも意識して書く。書写の授業中だけではない!

書写の授業のとりかた
 ①硬筆単独 ②毛筆単独 ③毛筆+硬筆 (①③は五十分)
 ④国語学習の一部(十分、十五分、二十分、二十五分)

持ち物
 授業には……書写教科書
 硬筆ペン・ボールペン等(いつも筆箱に入れておこう)
 毛筆用具(使うときには事前に連絡します。筆の手入れ
 足りない物を各自買い足しておくこと。半紙も個人で用意)

教室に置いておく物……書写教科書
 ※毛筆用具は使う時期にかぎって許可します。
 宿題……硬筆・毛筆ともに出すことがあります。

教科書から
 ○筆記具のいろいろ・歩み
 ○文字を書くときの姿勢
 ○学習のはじめに

今年のあなたの書写の目標……

書写学習の中で専門分野を作ってみよう! 専門の候補に○をつけよう
 ・硬筆・毛筆・ひらがな・カタカナ・楷書・行書・行の中心・文字の大小
 ・漢字と仮名の調和・配列配置(字配り) など

※小テスト
 ・黒板に書かれた()を答えなさい。

3 授業の流れ(第二時)

○目標の把握……演示を見て、基本点画の筆使いと基本点画の名称を確認する。

○試書……「元」を書き、各点画の名称を確認する。

○授業開き時の小テスト「基本点画の名称」の正答率を知り、その感想を書き、発表する。

※短冊黒板に基本点画を示し、点画ごとの男女別正答率を板書した。

○教科書P8「基本点画」を見て、形と名称を暗記する。

○覚えた点画の名称を答える。

※短冊黒板に示した基本点画を指し、一斉に答えさせた。

○基本点画の習熟を図る。漢字学習との関連を図る。

課題として取り上げた漢字(フラッシュカード)

- ・小学校で学習した漢字
- 「手」最終画 縦画↓そり
- 「風」一画目 曲がり↓そり
- ・中学校の新出漢字
- 「眺」(「じ」の見える橋) そり↓曲がり
- ・特に気をつけさせたい漢字
- 「心」最終画を「そり」で書けるか

○新聞やチラシ等に見られる書き文字の誤りを正す。

○本時の感想を書き、発表する。

4 授業を終えて

生徒は、授業開きで行った小テスト「基本点画の名称」の結果を提示した場面で、正答率の数字に刺激を受け、そこからいっそう意欲的に学習に取り組んでいた。また、用語の問題はさておき、試作した「フラッシュカード」による誤字例の提示も、生徒の意欲を引き出すとともに、基本点画の習熟を図る上でも効果があった。

本時のねらいを達成した感想も見られ、楷書の基本点画に加え、日常生活の一部である漢字を書くことにも目を向けるきっかけとなったと思われる。



※「フラッシュカード」は厚紙に毛筆で大きく書いたもの。

漢字テストや国語のノートに見られる問題の起こりやすい画(曲がり・そり)は、誤った画を朱墨で書いて強調した。「心」については、誤った形を示すのではなく、空欄とした。各自の用紙には、一字すべてを書かせるのではなく、正しい形(画)だけを書かせた。

〈生徒の感想〉

(1)「基本点画の名称」の正答率に対する感想

- ・もう中学一年生なのに、まだ基本点画を覚えていないのはまじい。
- ・みんな小学校で書写(毛筆)は四年間勉強したのに、基本点画などの細かいところは覚えていないことがわかって残念だった。

(2) 授業の最後の感想

- ・ふだん使っている漢字でも、基本点画は全くわからないことがわかった。
- ・自分でも直さなくてはいけないと思った漢字がありました。これからはそのことに気をつけてやりたいと思います。
- ・すごく楽しかったです。基本点画の問題が正解だったのよかったです。
- ・今日の授業でビックリしたことは、やっぱり基本点画の正答率でした。字の間違い直しでは、だいたい正確に書き直せました。自分で字を書くときも心がけていきたいです。
- ・毛筆の学習だったので覚えやすかったし、緊張しながらしっかり書けたと思います。いつも忘れずに基本点画を頭に入れておきたいです。
- ・習ったはずなのに少しも定着していなかった自分に失望した。書道教室に通っているのに。
- ・基本的な漢字でも、そりや曲がりなどをきちんと書かないと文字のバランスがくずれ、変な形になってしまうことがよくわかりました。

5 成果と課題

今回は、第一時「大地」で「也」の最終画を折れで書いていた生徒が見られたことと、日頃生徒が書く漢字に見られる点画の誤り(「そり」と「曲がり」の混同)から、生徒一人一人の基本点画への意識を向上させるべく実践した。

用材は、A4判更紙七枚をホチキスで綴じ、毛・硬筆のどちらも学習活動の順にこれに書かせて時間の短縮を図った。学習を振り返る際にも効果があるものと思われる。

生徒の感想からは、これまで基礎・基本として学んできた基本点画に対する意識の低さや、反省がうかがえる。また、漢字学習との関連について触れていた感想もあった。

この授業を一時間としてではなく、一部を楷書学習の第一時「大地」の導入として扱うことにより、書写の授業の確保、精選につながる。さらに「大地」で学ぶ内容を深めるためにも有効だと思われる、まだまだ工夫の余地を残すところである。



書写の学習は、学習内容を系統立てて積み重ねていくことが大切であり、さまざまな知識を必要とすることは言うまでもありません。これらのことを生徒に理解させるには、自己の課題に気づき、書写の学習を見直す機会を与えることが重要です。本授業は、基本点画にフィードバックして、自己の書写学習を振り返らせるとともに、今後の書写学習の意識改革にも及んでいます。生徒の声に、今後の書写の学習への意欲がうかがえます。

(M)